

## 〈シン・コスモポリタン〉に出会う —マクスーダ先生のご退職に寄せて—

小 原 文 衛

開学2年目の「きずな合宿」のことを思い出します。あれは4月でもまだまだ寒い時期で大杉の里の山の中、野外でカレーを作って食すというイベントでの一コマ。マクスーダ先生は、当然のことながら（ということだと思いますが）、学生や教員が作ったカレーは口にせず、何か別のものを食べておられました。それがおにぎり。梅干し入りでした。梅干しを食べるの？と驚いたものです。マクスーダ先生はそういう方で、文化間の違いにはかなりコンシャスで厳しいところもあるけれど、器が大きいとか懐が深いとか、日本文化を実に柔軟に受け入れられていました。自文化を大切に、そして、異文化は大きく腕を広げて抱きしめる。学生たちにもそのように接しておられて、いつも楽しそうに交流をされていたのを思い出します。

マクスーダ先生とは「国際交流論」と「異文化コミュニケーション論」という二つの必修科目をオムニバスでご一緒させていただきましたが、私のパートは理論編、マクスーダ先生のパートは異文化コミュニケーション実践編という構成になっていたと思います。とてもコスモポリタンとは言えない私の方は難解な理論を云々するしかないわけですが、マクスーダ先生はまさにご自身を教材のようにして、学生に異文化コミュニケーションを実地で体験、学修させておられました。先生の授業をたまに覗きますと、そこには午前中の授業で寝ぼけ眼の学生を覚醒させて余りあるほどの力と熱のこもった授業がいつも展開されていて、毎回感服したものです。様々な背景をもつ学生たちとの異文化コミュニケーションと先生自らが格闘する姿を見るようでした。

そういえば、コロナ禍の始まりの記憶もあります。大学近くの商店街の化粧品店で、おばあちゃん手作りのマスクを売り出されておりました。あの頃は国内もパニック状態で不織布のマスクが手に入らず困っていて、これ幸いと早速出かけたものです。私が公立小松大学の教員であることに気づかれたお店の奥様が、「小松大学の先生ですか？ マスクーダ先生も買いに来てくださーたんです！ マスクーダ先生にはいつもお世話になって…」と話し来られてきました。いやいや、確かに私はマスクを買いに来たわけですが、だからといって、マスクーダって…。と半ば当惑しながらも大学に戻ったものです。

最近になってマクスーダ先生にこの話をしたところ、どこ吹く風と言う感じ。「いいのよ、マスクーダでも。私のこと知ってくれるなら、名前なんて間違えられても全然気にしないから。そもそもインドの名前は難しいんだから」とニコニコとしながら話してくれました。こういうところがマクスーダ先生だなと思います。ことご自分のお名前に関しても、異文化をいとも簡単に快く

小 原 文 衛

受け入れていらっしゃる。インド、モンゴル、日本をはじめとした広大な領域を歩いてこられた〈シン・コスモポリタン〉のマクスーダ先生ならではのと思います。

まだまだ先生には教えていただきたいことが沢山ありますし、これからも学生、教員を含めて本学と末永いお付き合いをいただければと思います。

マクスーダ先生ではありません。マクスーダ先生です。本当に先生は教員としても、同僚としても MAX = マックスだ、と言いたいです。